



## 新年度ごあいさつ



病院事業管理者 丹野 弘晃 たんの ひろあき

### 働き方改革本格始動

新年度を迎え、ご挨拶を申し上げます。コロナ禍についてはまだまだ予断を許さない状況が続いておりますが、医療従事者に対するワクチン接種が開始され、一筋の光が見えてきたように思います。この感染災害は、我々の生き方そのものに深く影響を与えている、とつくづく感じます。一般市民の皆さんの受療行動にも変化があり、医療施設を受診する患者数の減少が続いているようです。ひょっとしたら、コロナ禍が終息しても、元に戻らない可能性もあります。今後起こりうる現象が、新型コロナのせいで、5年以上早まっていると考えた方がいいのかもしれない。

さらに今国会では、医師の働き方改革・タスクシフトやタスクシェアを推進する法令改正（具体的には診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士、救命救急士に関するもの）・今後の医療計画を5疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患）・5事業（救急医療、災害時医療、へき地医療、周産期医療、小児医療）から新興感染症を加えた6事業とする改正等が審議されており、成立する見込みです。いよいよ2024年施行に向けて、働き方改革が本格的に始まったと感じております。

患者さんの数が増えない中、働き方改革をどう進めていくのか、これは悩ましい問題です。一般的には、組織の業績＝労働時間×労働生産性と言われております。働き方改革は労働時間の適正化だと思いますので、労働時間は減るでしょう。当然のことながら、業績を維持し発展させるためには、如何にして労働生産性を向上させるか、ということになります。ここに、タスクシフト/シェアが大きく関わってきます。医療施設は、国家資格を中心とした有資格者で成り立っている組織です。ここで重要となるのが、各専門職種における「本来業務」とは何かを問い直すことだ、と言われております。生産性向上の観点から、①本来業務、②他の職種でもできる業務、③その他の誰かがやらなければならない業務、に振り分けてみてください。②はタスクシフト/シェアへ、③はRPA等のICT化で対応できるのかもしれない。働き方改革は、如何にして各個人の生産性を上げるかということですので、自分事として捉え、是非考えて欲しいと思います。

この振り分けが、地域全体で共有できれば、働きやすく質の高い医療を提供できる地域という特徴を持つ「まちづくり」にもなるのではないかと妄想しております。今年度もよろしくお願い致します。



## 新年度ごあいさつ



院長 たか はし みち なが  
高橋 道長

令和3年度を迎え、常日頃、医療連携でお世話になっている皆様にご挨拶を申し上げます。

今年度は、当院から皆様に、早急にお伝えすべき事案があります。この4月から当院と三沢市立三沢病院との間で設立した法人が、地域医療連携推進法人として活動を開始いたします。上十三地域の人口が年間2000人程度減少していくことが予想されている中で、これまで通り右肩上がりの医療需要を想定することはできません。そこで、両病院による法人を設立し、医療連携することにより、人口の減少に見合った医療機能の充実を図る取り組みを行うことになりました。具体的には、両病院の医療機関としての独立性は保ちつつ、受診者の方々に対する相互診療体制を構築し、高額医療機器の更新や薬剤の共同購入の面で協力し、さらに、お互いの職員の人事交流などにより、効率的に医療を行うことを目指します。不要な医療支出を削減し、両病院の収支の改善も図りたいと考えています。

さて、続いて当院の医師の人事についてご報告いたします。4月から常勤医7名、初期研修医6名の先生をお迎えしました。産婦人科の診療部長として、渡邊豊治先生、消化器内科科長として内藤健夫先生と李秀載先生、泌尿器科科長として濱野逸人先生、脳神経外科科長として片貝武先生、外科医員として神山信樹先生と右田修介先生（初期研修医から外科専門医研修として研修継続）、初期研修医として、荻野雅也先生、芳賀悠先生、菅葉月先生、土屋敏裕先生、柳田錬先生、成田茂樹先生が着任しました。さらに、6ヶ月間の獨協大学研修を終了して、徳満敬大先生がメンタルヘルス科に復帰しております。一方、泌尿器科診療部長として、外来・病棟・透析診療に大貢献してこられた寺井康詞郎先生が、4月末日を持って退職する予定です。新たな人材と若い力が、病院と地域医療を活性化させることを期待しています。

最後に、昨年度悩まされ続けた、コロナウイルス対策についてお伝えいたします。当院は、昨年10月に医師会の先生の協力を得て、週3回のコロナ検査センターを立ち上げ、12月には、A・B2棟のプレハブ棟において発熱外来の運営を開始しております。救急車で搬入される方をA棟で、歩行できる方をB棟で初期診療にあたり、重症度別に3ルートに分割して本館へのコロナ感染者の侵入を水際で防いできました。三沢市立三沢病院との連携も良好で、保健所の調整の元、両病院間で無理のないコロナ感染者の相互受け入れを行なっています。昨年5月以降、十和田市内では、クラスターの発生はなく、先月からは、医療従事者に対するワクチンの接種が開始されました。今後、大規模クラスターの発生がないまま、高齢者の方々に続いて市民の皆様全員にワクチン接種が順調に進み、コロナ感染が収束に向かうことを祈念しております。

さて、これまで丹野管理者のもと、毎年、新年度の目標が設定されてきましたが、今年度の最大目標は、コロナウイルスの収束に置かせていただきます。続いて昨年同様、働き方改革の推進と経営の透明化・可視化を掲げ、目標達成を目指します。コロナ自粛でお疲れのこととは存じますが、感染症収束へ向けて、ご協力のほど、何卒よろしく願いいたします。

